



TITLE:

白居易の制誥の新體と舊體について

AUTHOR(S):

周, 雲喬

CITATION:

周, 雲喬. 白居易の制誥の新體と舊體について. 中國文學報 1994, 48: 35-62

ISSUE DATE:

1994-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177560>

RIGHT:

白居易の制誥の新體と舊體について

周 雲 喬

高知大學

はじめに

『白氏長慶集』では中書制誥を新體と舊體とに分けているが、新體制誥と舊體制誥の文體の特質は一體何であろうか。最初にこれに對して目を注いだのは陳寅恪氏であるが、小論では陳寅恪氏の白居易の制誥の新體と舊體とに對する論説を考證の起點とし、新體と舊體の實體把握を圖る。さらに一步進めて白居易の中書制誥の本質についての考察を試みてみようと思う。

一 陳寅恪氏の論説について

陳寅恪氏の『元白詩箋證稿』^①には白居易の中書制誥の文體について、次のように述べている。

白居易の制誥の新體と舊體について（周）

今白氏長慶集制誥有「舊體」、「新體」之分別。其所謂「新體」、即微之所主張、而樂天所從之復古改良公式文字新體也。

とあり、この中で一番注目すべきところは陳寅恪氏が白居易の制誥の新體に「復古改良公式文字」と言う定義を下したところであるが、その「復古」と「改良」との関連性についてはやや明瞭さを缺くという感じが否めない。それは如何に解釋すべきなのであろうか。まず陳寅恪氏の「復古改良公式文字」に分析を加えてみることにしたい。その糸口として「復古改良公式文字」の前後の繋がりを見てみよう。上記に見たように陳寅恪氏の文中にある「微之所主張」とは、後述の如く元稹の「制誥序」^②の提出した制誥復古論であり、即ち元稹は制誥に古文體を回復することを唱えたというものである。陳寅恪氏の「復古改良公式文字」という定義を分析すれば、次のような思考形式を導き出すことができる。即ち

「微之所主張」↓復古↓「樂天所從之」（復古）↓改良公式文字↓新體。

だから陳寅恪氏のいう「復古改良公式文字」とは、古文體の公文書であること、極めて明らかであろう。即ち白居易が元稹の制誥復古論の後繼者として作った新體制誥は古文體のものにほかならないと思われる。

陳寅恪氏の觀點は學者達の中では廣く認められている。

花房英樹氏の『白居易研究』^③には白居易中書制誥についてこの「俗體」を「舊體」と謂い、稹に續いて「新體」を制作して行った。居易が「繼ぐ者これに效う」という、その「繼ぐ者」の第一は、外ならぬ居易自身であった。そして以後、この「古道」に則る「新體」は續いて行った。

とある。花房英樹氏は白居易が元稹の後繼者として「古道」に従って作った「新體」とは散文體であると考えている。そして岡村繁氏の『白氏文集』中書制誥の解題には「『舊體』とは傳統的な駢文體の制誥をいい、新體とは新興の高潔古雅な散文體の制誥をいう。」^④と指摘している。以上諸氏の論説は疑いもなく、陳寅恪氏の觀點を受け入れている。朱金城氏は『白居易集箋校』中書制誥一の「箋」に「舊體

即用駢儷文體所草擬之制誥。」^⑤と述べている。次に「元白詩箋證稿第四章：今白氏長慶集中書制誥有『舊體』『新體』之分別。其所謂『新體』，即微之所主張，而樂天所從之復古改良公式文字新體也。」と摘録し、そして中書制誥四の「箋」にはなぜ制誥を新體と舊體とに分けて作ったかについて、次のように説明している。「『新體』與舊體駢儷對立之散體……唯當時舊體製誥積習已深，卒不能變。蓋製誥體裁，遷擢者須鋪敘其資歷、政績，降謫者須指斥其罪過，散文難於措辭，駢體易得含糊也」^⑥。この文の趣旨は、官吏の任免に關して散文體は措辭が難しい場合があるのに對して、駢文體は言葉を曖昧にしやすいところにある。それにしても白居易の中書制誥全體を眺めてみると、官吏の昇進と左遷という二つの場合にどのような文體を用いているか、兩者の間に內的、必然的な繋がりを見つけることは難しい。というのは、免職、左遷の場合に婉曲に表現できる駢體が用いられているとは限らないからである。以上例として挙げた諸氏の觀點は陳寅恪氏の說と一致するものである。しかし平岡武夫氏と孫昌武氏は、陳寅恪氏と異なる見

解を持っている。平岡武夫氏の『白氏文集の校定・序説第二』は「白居易の中書制誥の作は……舊體は散文體、新體は駢文體、文體のちがひによって分つ」と述べている。鈴木虎雄氏は「又文體の差であるが中書制誥では舊體、新體を分けてをる。舊體は從來どほりの舊型の駢體であり、新體は多少の散意を加味した文體である」(「支那の詔敕文と其の起草者」といい、舊體と新體兩方とも駢體文という意見を提出されている。孫昌武氏は「他(白居易)在編集『白氏長慶集』時分制誥爲舊體與新體兩類。新體就是俗體、駢體；舊體則是改革後的散體，名之爲舊，是表示恢復古道的意思」^⑨という。しかしながら、上述諸氏の説によつて新體は散體文といおうが、駢體文といおうが、それは結論でなく、白居易の中書制誥の新體と舊體の實態に觸れるものではない。それに對して、もっと詳しく考察する必要がある。

陳寅恪氏は「其所謂『新體』，卽微之所主張，而樂天所從之復古改良公式文字新體也」^⑩と指摘しているが、元稹の後繼者としての白居易が作った新體制誥は確かにその復古

白居易の制誥の新體と舊體について(周)

論に従っているものであろうか。またたとえ白居易の新體制誥が「復古改良公式文字」であるにしても、その舊體制誥とはどんな文體であらうかなど、幾つかの疑問點が残っている。これら諸問題を一つずつ考察しなければ、白居易の制誥の文體は明らかにならないであらう。

二 制誥の文體について

『湯誥』(尙書・商書)、『大誥』、『康誥』(尙書・周書)などの詔書は『尙書』に收められ、全て散體文で書かれている。漢代の制誥にもその作風が続いていた。魏晉以來、修辭の技巧が高まったことと、音韻の知識が廣まったことに伴つて文章の駢文化が廣く定着していき、制誥にもその傾向が反映されるようになり、對句と四、六字句を含み、修辭や典故の技巧に力が注がれ、押韻は求めないが、リズムの整合性が追求された。漢の蔡邕の『獨斷』^⑪は

制書，帝者制度之命也。其文曰制詔。三公敕令、贖令之屬是也。詔書者，詔，誥也。……有三品，其文曰：「告某官，官如故事」，是爲詔書。群臣有所奏請，無

尙書令奏制之字，則答曰：「已奏如書」，本官下所當至，亦曰詔。

と言つて、單に制詔を公文書として説明している。しかし制詔は皇帝の命令を伝える重要な文章形式として存在しただけではなく、制詔と文學とは緊密な關連性を有するともいえる。視點を制詔の持っている文學性の面に置いて、早くからこの視角で論じているものに、劉勰の『文心雕龍』がある。その中には「詔策」の一節があり、皇帝の命令としての「王言」についてのあらゆる文體を取り上げている。その後、詔策の文體については、『文鏡秘府論』の『文筆式』^⑬が詔策を詩賦銘などの「文」と並べて、「筆」に分類して、諸文體の首位に置いている。これは詔策を文學の範疇に屬させたことを示している。

制作之道，唯筆與文。文者，詩賦銘頌箴贊用誅等，是也。筆者，詔策移檄章奏書啟等也。卽而言之，韻者爲文，非韻者爲筆。文以兩句而會，筆以四句而成。文繫於韻，兩句相會，取於諸合也。筆不取韻，四句而成，任於變通。故筆之四句，比文之二句。驗之文筆，率皆

如此也。

ここでは「文」と「筆」との區別が指摘されて、「文」は二句で一つの纏まりを成し、韻を踏むに對して、「筆」は韻を踏まず、四句で文章を完成する。それに續いて修辭と聲調などを忌避すべき病をも詳論している。殊に聲調が文章に對して果たす作用を述べている。

然聲之不等，義各隨焉。平聲哀而安，上聲厲而舉，去聲清而遠，入聲直而促。詞人參用，體固不恆。筆以四句爲科，其內兩句末，并用平聲，則言音流利，得靡麗矣。兼用上去入者，則文體動發，成宏狀矣。看徐魏二作，足以知之。徐陵『定襄侯表』云：

鴻都寫狀，皆旌烈士之風；麟閣圖形，咸紀誠臣之節。莫不輕死重氣，效命酬恩；棄草莽者如歸，膏平原者相襲。（上對第二句末「風」，第三句末「形」；下對第二句末「恩」，第三末「歸」皆是平聲。）魏收『赤雀頌序』云：蒼精父天，銓與象立。黃神母地，輔政機修。靈圖之跡鱗襲，天啟之期翼布；乃有道之公器，爲至人之大寶。（上對第二句末「立」，第三句末「地」；下對

第二句末「布」，第三句末「器」皆非平聲是也。）徐以靡麗標名，魏以宏狀流稱，觀於斯文，亦其效也。

平仄が異なると共に文章に現れる意味も變わってくる

という役割が詳記されるほか、「詞人參用，體固不恆」との指摘がある。このように平仄は文意によって調節され、嚴格な規則はないのである。徐陵と魏收との「表」、「頌」を例文としてあげ、平仄が「筆」と「文」の何れの文體にも存在して句末に相互交錯していることが注目を引く。それに例文は隔句對（鴻都寫狀，皆烈士之風；麟閣圖形，咸紀誠臣之節。）を用いている上、四字句、六字句とも整然と配列している。これを通して「文」、「筆」の定型化の傾向が現れてくる。興膳宏氏は「無韻の文の條件」で、

詩・賦を中心とする有韻の文に對置される無韻の文に關しては、形式面の齊整がより一層重視される傾きにある。蕭統の時代の基準的な文體は勿論駢文であるが、駢文の備えるべき諸要件としては

一、四字句と六字句を基本單位とする。

二、對句形式により全編を構成する。

白居易の制誥の新體と舊體について（周）

三、典據のある表現を多用して、文の奥行きを深める。

四、文字の美觀に配慮し、同字の重出はできるだけ避ける、などが挙げられる。

『文選』以後の六朝末になると、これらに加えて、平仄を整えて音聲の調和を圖ることも重んぜられるようになる。

と指摘された。

漢代の蔡邕の『獨斷』は制詔の形式を述べるのみで、劉勰の『文心雕龍詔策篇』と『文筆式』は文學の立場から文體の性質を考察しており、制詔の文體に關する認識が一層深まってきた。漢代と六朝の詔書を見比べてみると、その修辭と平仄において詔書の發展した筋が明瞭になる。まず漢の文帝『勸農詔』¹⁰を示そう。

道民之路，在於務本。朕親率天下農，十年於今，而野不加闢，移一不升，民有飢色。是從事焉尙寡，而吏未加務也。吾詔書數下，歲勸民種樹，而功未興，是吏奉吾詔不動，而勸民不明也。且吾農民甚苦，而吏莫之省，將何以勸焉。其賜農民今年租稅之半。（『全漢文』卷二）

これは散文體を用いており、文飾ある言葉を用いず、對句や平仄もない。陳述式の文句を用いた、平易で、質朴な散文である。後漢の光武帝の『制書報耿純』には「侯前奉公行法，朱英久吏，曉知義理。何時當以公事相是非。然受堯舜之罰者，不能愛己也。已更擇國士，令侯無介然之憂。」とある（『全後漢文』卷二）。これも散體の制語である。しかし漢の詔文において已に駢儷の芽が現われはじめていた。『文選』に漢の武帝の詔書二首が收められており、第一の『詔』には

詔曰：蓋有非常之功，必待非常之人。故馬或奔踴而致千里，士或有負俗累而立功名。夫泛駕之馬，駢馳之士，亦在御之而已。其令州縣察吏民，有茂才異等，可爲將相及使絕國者。

とある。その中の「馬或奔踴而致千里，士或有負俗累而立功名」という文は對句と看做され、それ故これは駢體文であるとの見方がある（羅宗強『隋唐五代文學思想史』一九五ページ参照）。『文選』がこの文を収めることは、漢の時代の公文書として、文句の整然化と文字の前後が照應するもの

が有るためで、それは六朝文學の基調である文辭の彫琢や對句の頻用の傾向に符合するためだと思われる。もう一つの『賢良の詔』について、興膳宏氏は『文選・總說』において「『賢良の詔』は」四字句が多用されており、對偶の形をなすところも少なくない。數ある詔の中から範とすべき作品として選ばれているのは、駢體の趣に近づいていることによるところが大きからう。」と指摘された。六朝になると對句だけでなく、字句整然、平仄交錯のかなり嚴密な駢體詔書が徐々に定着していった。

ではすこし時代が下がった、齊、梁の詔書の様子を見てみよう。一例として南齊の明帝の『課農桑詔』を挙げる。食惟民天，義高姬載；蠶實生本，教重軒經。前哲盛範，後王茂則。布令審端，咸必由之。朕肅展嚴廊，思引風訓。深務八政，永鑒在勤。靜言日昃，無忘寢興。守宰親民之主，牧伯調俗之司。宜嚴課農桑，罔令游惰。揆景肆力，必窮地利。固脩堤防，考校蠶最。若耕蠶殊衆，具以名聞。游怠害業，即便列奏。主者詳爲條格。

これは先に挙げた漢の詔書とは違い、ほとんどの句で平

仄を整えている。字句も四字或いは六字の句主體として整然と構成されている。このように六朝においては詩歌だけではなく、制誥のような公文書においても已に平仄に留意することになっていたと見られる。また四聲平仄の整齊は單に詩賦の分野に限らず、『文筆式』に述べる如く、「筆」の分野でも、つまり文學の全般的な領域に展開されるようになったと考えられる。次に沈約の撰した『授蕭重休左僕射詔』と『王亮等封侯詔』を例として挙げてみよう。

門下、尙書萬事之本，隆替是寄，總司頓闕，宜速有人。征虜將軍吳興太守、建安縣開國子蕭重休：才學淹通，識裁詳允。內著嘉庸，外敷美政。入副朝端，僉議斯在。可守尙書左僕射，餘如故。主者施行。（『授蕭重休左僕射詔』）

この中では「才學淹通，識裁詳允。內著嘉庸，外敷美政」は對句であり、第二字の「學、裁、著、敷」、第四字の「通、允、庸、政」は傍點のように、平仄が交錯しているが、目を引くのは第二字の平仄が交替する例もかなり見られることだ。これは唐代になっても續いている。『王亮

白居易の制誥の新體と舊體について（周）

等封侯詔^㉔ 一節に

並時宗民秀，徽望允集。協贊朝機，彝倫是寄。秉文經武，任惟腹心。方賴嘉謨，克弭時難。宜疏爵建社，與國同休……。

これらを漢の制誥と比べてみると、四字句が多用されている上に、第四字あるいは第二字で平仄を整えようとしていることがよく分かる。しかし、駢體にしても、文采の立場でいえば、この駢體制誥は他の形式の駢體文と對照してみれば、少し遜色があるようだ。例えば對句、修辭の角度から作風が異なるところの見られるのは、沈約の文であり、『文筆式』が「詔策」と一緒に「筆」の範疇に歸屬させた「章」を例として挙げてみよう。沈約の『爲晉安王謝南兖州章』^㉕に

臣以萊辱，幼無秀業。依天宅照，藉海憑瀾。王爵早加，藩塵夙樹。進不能閑詩西楚，好禮北河；退無以振采六條，宣風萬里……。

とある。これは對句をさらに多用することによって修辭面の美しさをもたらしよう配慮されているようで、先に見た

沈約の制誥の作風とはやや異なっている。詔書は「王言」の傳統として、相對的に典雅素朴な文句が用いられており、駢文が一段と高い水準に到達した六朝でも、詔書の修辭に對しては慎重な態度が取られていたようだ。上述したように漢の詔は古雅の趣を尊んで、たまに駢儷の文句が見えるが、句形の齊整や音聲の調和においては、六朝の詔書と大きな徑庭がある。駢體の詔書は、六朝になって平仄が重んぜられてから、その成熟期を迎えたのである。

三 元稹の『制誥序』について

上述した如く、劉勰の『文心雕龍』は既に制誥を文學のジャンルとして考察していたが、唐代になると詩文が盛行し、制誥も文學の才能の一つとして認められた。『玉海』に引く「辭學指南」^⑦には

顏師古謂爲制度之命，唐王言有七，其二曰制書，大除授用之。學士初入院，試制書，批答共三篇（又詩賦各一道，號曰五題。後唐停詩賦。白居易入翰林，以所試制誥『加段祐兵部尚書領涇州』。韓偓試武臣授東川節

度制。）此試制之始也。制用四六，以便宣讀……。

とある。これによって唐代の學士は翰林院に入る際、詩賦の試験だけではなく、制誥の試験も行われたことが明らかである。學士の制誥を作る能力を考査する爲に、制誥を詩賦と同じ試験科目として實施していたのであり、制誥の試験が唐の時代から始まったことを示している。このように制誥が文學の才能の一つとして認められはじめ、宋に至るまでその影響は續いた。つまり中唐において制誥は單なる公文書としての地位を脱して、詩賦と同じ位置で扱われ、本格的に文學の領域に入り始めたことが分かるのである。また中唐に至るまでに政治的、軍事的活動が活發になると共に、大量の制誥が制作され、一つの文學様式として獨自の發展を遂げることとなった。

唐代では制誥の文體は駢體と散體が兼ねて行われているが、駢體制誥がその優位に立っているといえる。そのうちに若干の變化が起きてきた。中唐に於いてその先端を發するのは陸贄であり、その後、元稹が制誥體の改革を提唱したことから、白居易の新體、舊體の制誥が出現したことでこ

の變化の勢いが極まるに至った。

制誥の文體について白居易は七言排律『餘思未盡加爲六韻重寄微之』、『白氏長慶集』卷五十三、四部叢刊本、下同。二三一九で、自分の見解を述べている。

海内聲華並在身，篋中文字絕無倫。

遙知獨對封章草，忽憶同爲獻納臣。

走筆往來盈卷軸，除官遞互掌絲綸。

制從長慶辭高古，詩到元和禮變新。

各有文姬才稚齒，俱無通子繼餘塵。

琴書何必求王粲，與女猶勝與外人。

この詩の第四聯には白居易が自ら注を加えて「微之長慶初知制誥，文格高古，始變俗體，繼者效之也。」という「白居易集箋校」卷二十三参照。これは長慶初年に制誥の文體を變革したことを、元和年間の「新樂府」と一緒に並べて論じている。更に白居易の『元稹除中書舍人翰林學士賜紫金魚袋制』には「去年下拔自祠曹員外，試知制誥而能斐繁詞，鏗繁句，使吾文章言語與三代同風。引之而成綸綍，垂之而爲典訓。」（『白氏長慶集』卷三十三、一五五七）という。

白居易の制誥の新體と舊體について（周）

「三代同風」とは、『漢書』武帝紀の「贊曰、號令文章，煥焉可述。後嗣得遵洪業，而有三代之風。」という文がその出典であろう。元稹の制誥は「夏、商、周」のような質朴な文風であるとの評價を白居易は與えた。上述の資料から、元稹が制誥の文體改革の役割を果たしたことに注目しなければならない。元稹も白居易もその文學活動は詩歌の領域に限られず、様々なジャンルに廣く及んでいるのである（川合康三氏「言葉の過剰」参照、『白居易研究講座』第二卷『白居易の文學と人生』勉誠社 一九九三年）。だから元稹が「制誥」の文體にも改革を意圖したことは十分に理解できる。元、白はほぼ同時期に知制誥の役職を擔當しており、白居易の新、舊體制誥を考察する時、元稹との關連を見捨てることはできないので、ここでは最初に元稹の制誥改革の理論の概要を紹介しておこうと思う。

元稹は「制誥序」^④で彼の制誥の創作論を率直に述べており、それは彼の文學理論の一側面を表している。

制誥本於『書』、『書』之誥命訓誓，皆一時之約束也。自非訓導職業，則必指言美惡，以明誅賞之意焉。是以

讀『說命』，則知輔相之不易；讀『胤征』，則知廢怠之可誅。秦漢已來，未之或改。近世以科試取士文章，司言者苟務矜飾，不根事實；升之者美溢于詞，而不知所以美之之謂；黜之者罪溢于紙，而不知所以罪之之來；而又拘以屬對，跼以圓方，類之于賦判者流，先王之約束蓋掃地矣。元和十五年，余始以祠部郎中知制誥，初約束不暇，及後累月，輒以古道干丞相，丞相信然之。又明年，召入禁林，專掌內命。上好文，一日，從容議及此，上曰：「通事舍人不知書便其宜，宣贊之外無不可。」自是司言之臣，皆得追用古道，不從中覆。然而余所宣行者，文不能自足其意。率皆淺近，無以變例，追而序之，蓋所以表明天子之復古，而張後來者之趣尙耳。

『制誥序』により元稹の制誥改革の理論が大體分かるであらう。元稹の「賦判者の流に類す」という批判は制誥を尙書の道に回復させよう、淺近かつ平易な文を作ろうという主張を間接的に唱えたことになる。これから見てみると、元稹の制誥改革の骨子は即ち古文への回歸と考えられるの

である。白居易も『策林・議文章』³³で「書事者罕聞于直筆，褒美者多睹其虛辭。……今褒貶之文無覈實，則懲勸之道缺矣；美刺之詩不稽政，則補察之義廢矣。雖彫章鏤句，將焉用之？臣又聞：稂莠秕稗生於穀，反害穀者也；淫辭麗藻生於文，反傷文者也。」（『白氏長慶集』卷四十八、二〇一四）といっている。白居易は事實を伝えぬ虚辭の褒美と「淫辭麗藻」に反對し、「爲文者必當尙質抑淫，著誠去僞」（『策林・議文章』）と唱えて、そうすれば「何慮乎皇家之文章不與三代同風者歟？」（『策林・議文章』）と述べている。元、白がこれらの説を提出したのは、大曆、貞元の文學復古の風潮の餘韻であると思われる。『舊唐書』卷一百六十、「韓愈傳」は「大曆、貞元之間文士多尙古學，楊雄、董仲舒之述作，獨孤及、梁肅最稱淵奥」といい、その時期の文學の復古主義の傾向は韓愈、柳宗元らの「古文復興運動」の背景となっている。古文運動は當時の文壇において大きな反響を呼んでいたのであるから、元稹もその影響を受けていないとは考えられないであらう。元、白の「新樂府運動」は韓、柳の「古文運動」の改革主張と近似點がある。元稹

『制誥序』における文學主張は韓愈と類似のところがある。韓愈は『答李翱書』の中で「惟陳言之務去」といい、その「陳言」というのは、古い常套語のことで、文章が無内容になる原因を成し、これこそ元稹が「不知所以美之之謂」、「不知所以罪之之來」（『元稹集』第四十卷、『制誥序』という空文を生起する一つの要因となるものであろう。すでに引いた白居易『元稹除中書舍人翰林學士賜紫金魚袋制』の「芟繁詞、鏟弊句、使吾文章言語與三代同風」という評から見ても、韓、元、白三人の文學態度はこの點に於いて共通するところがあると思われる。これは陳寅恪が『元白詩箋證稿』に「其實當時致力古文，而思有所變革者，並不限於昌黎一派。元白二公，亦當日主張復古之健者。不過宗尙稍不同，影響亦因之有別，後來遂湮沒不顯耳。」（『元白詩箋證稿』第四章）と指摘した通りである。元稹の『制誥序』は公文書だけでなく、幅廣い範圍の文體の改革を提唱しているとして理解してよいのである。これは韓愈と同じく元稹が當時の文學風潮の弊害に對する共感に基づいて「復古」の宣言をしたものであり、まさに文體の改革を公文書からはじ

白居易の制誥の新體と舊體について（周）

めようとしたことであらう。そして孫昌武氏の『唐代古文運動通論』（第七章）にも

白居易『與元九書』、元稹『敘詩寄樂天詩』等都是談詩的，但其爲時爲事的主張，實際也通於文章。比較起來，他們論文章的言論少些，直接說到文體改革的更少，但從文學觀念看，他們與韓、柳有許多基本的共同之處。と元、白は文學觀念の面で古文派と共通點があることを指摘している。

制誥の文體改革は早く南北朝時代に起こった。西魏の最高權力者宇文泰は蘇綽に命じて、浮華な文體を改革させ、新しい文體として『尚書』に模擬した『大誥』を作り、古文體の詔書を出したが、しかしこれは『尚書』の生硬な模倣になってしまい、文體改革に對して期待された効果を果たすことができなかった。「蘇綽風の文體が、矯枉過正のむりじいであつたため、長い生命を保たなかつたことを物語るにはかならなかつた」^③（吉川幸次郎氏「北周の大誥について」参照）と、吉川幸次郎氏の指摘された通りである。蘇綽の『大誥』は『周書・蘇綽傳』（卷二十三）に收められている。

元稹の文體改革は蘇綽の場合とは異なつて明確な文學的主張を持つており、また文體改革の實踐面から見て、元稹の制誥は前人の文體を類型的にあてはめたような缺陷がない。元稹の文體改革が蘇綽より一步進んだ點はそこにある。

元稹の『制誥序』の改革主張は駢體制誥が主導的地位を占めていた當時にあつて、非常に大膽な新説であり、中唐の文壇に新しい風を吹き込んだに違いない。しかし元稹の文章は「而猶以微之之文，世人知愛之者猶少」という婁堅『重刻元氏長慶集序』、『元稹集』付録二「序跋」の評價のとおり、元和體の詩歌のように人々に傳誦され、不滅の影響を持つものではなかった。宋代の劉麟は次のように記述している「元微之有盛名于元和、長慶間。觀其所論奏，莫不切當時務。詔誥歌詞，自成一家，非大手筆，曷臻是哉。其文雖盛傳一時，厥後浸亦不顯。唯嗜書者時時傳錄，不亦甚可惜乎」、『元稹集』付録二「序跋」。従つて元稹の文は當時に於いてはある程度の反響を呼びはしたが、殘念ながらこの反響は長くは續かなかつたのであり、元稹の制誥改革は彼の望んでいたような決定的な役割を果たさなかつた。

とが分かる。韓愈、柳宗元の古文運動が興起すると共に、元稹の制誥改革の理論が出て、白居易の新、舊體制誥も出現し、元和時期の文學領域には革新の活氣が漲つていたと想像しうるであろう。

『白氏長慶集』の中には白居易が主客郎中知制誥、中書舍人の職務を擔當していた間に書いた中書制誥も多く見られ、二百三十三篇（作品番號一五四—一七四六）がある。『舊唐書』は「昔建安才子，始定霸於曹、劉；永明辭宗，先讓功于沈、謝。元和主盟，微之、樂天而已。臣觀元之制策，白之奏議，極文章之壺奧，盡治亂之根荑。非徒謠頌之片言，盤盂之小說」（卷百十六「元稹白居易傳論」といい、元、白の制策奏議に對して、最大の贊辭を與えている。しかし『新唐書』の評價は随分違ひ、「白居易傳贊」には「居易在元和、長慶時，與元稹俱有名，最長于詩，它文未能稱是也」（卷一九）とあつて、白居易の詩を除く、賦、判、制誥、奏議などは全面的に否定され、曹丕の『典論・論文』^④の文句を引用して、「它文未能稱是也」と明言している。

兩唐書で白居易の文に對する評價が随分食い違つてい

のは、駢文派と古文派との見解の相違によるものである。元、白は文學觀念においては華美、裝飾的な文體に反對する主張を提出したことは間違いない、その點では韓、柳の古文派と共通性がないではない。しかし彼らは朝廷における官僚としての地位及び政治的に微妙な立場のため、古文派と斷言することはできない。文學創作でも駢體を完全に捨て去ってはいなかった。その爲、『新唐書』は編纂者としての古文派の歐陽修、宋祁が元、白の文章を異端と看做して、積極的な評價を與えなかったと理解しうるであろう。『舊唐書』の贊は「文章新體、建安、永明、沈、謝既往、元、白挺生」（卷一一六）といい、元、白を沈、謝と並列して、その時代の文學に新しい個性を付與したものと褒めた。次に韓愈に對してはどのような評價が與えられているかを見てみよう。『舊唐書・韓愈傳』には「愈所爲文、務反近體、抒意立言、自成一家新語。後學之士、取爲師法、當時作者甚眾、無以過之、故世稱韓文焉」（卷一六〇）とあり、韓愈の文章は「一家新語」として首肯されるが、しかし『新唐書』の「抵牾晉魏、上軌漢周、唐之文完全爲一法、

白居易の制誥の新體と舊體について（周）

此其極也」（卷一七六『韓愈傳贊』）という高い評價には及ばない。元、白に對する『舊唐書』の「元和主盟」（卷一一六）という評價と、『新唐書』の「居易在元和、長慶時、與元稹俱有名、最長于詩、它文未能稱是也」（卷一一九）との差は大きい。新、舊唐書の韓愈と元、白に對する褒貶の差異から、兩書の文學的立場の違いがはっきり見てとれるであろう。

ところで元稹の制誥に關して、『唐宋白孔六帖』には「元稹擢祠部郎中知制誥，變詔書體務純厚明切，盛傳一時。」とあることによっても、元稹が制誥改革に大きな影響を與えていたのは、間違いないと思われる。

白居易は『餘思未盡加爲六韻重寄微之』の中で、「微之長慶年初知制誥，文格高古，始變俗體，繼者效之也。」（『白居易集箋校』卷二十三、二三一九）という注を付け加えている。また白居易は『河南元公墓誌銘』では「制誥，王言也。近代相沿，多失于巧俗。自公下筆，俗一變至于雅，三變至于典謨。時謂得人。」（『白氏長慶集』卷六十一、二九三九）と記している。ここでは駢體によく用いる美辭麗句を

巧俗といつており、元稹によつて俗が雅に變わつていったというのは、やはり制誥の文體の變化を指摘している。徐師曾は『文體明變序説』で「唯唐無誥名，故仍稱制。其詞有散文，有麗語，則分爲古、俗二體云」といい、ここで制誥は散體文と駢體文に分けられている。古體は即ち散體文であり、俗體は即ち駢體文であることは明らかである。そして唐人の制誥を収めている『大唐詔令集』をひもといてみると、駢體文がかなり多くあり、駢體は公文書に廣範圍に使用されていたと判斷できる。このように唐代の制誥には元稹が提唱した古文體制誥も存在しているが、駢體文は依然として制誥の主流を占め、晩唐に至つて駢體文は一層興起して、この影響は宋の時代まで續いていく。

元稹の制誥の實作を見れば、それは彼の制誥復古論と大體一致していることが明らかであるので、次に元稹の制誥を考察してみよう。『崔郾授諫議大夫』（『元稹集』卷四十五）の全文をあげる。

敕：郾：昔我太宗文皇帝以魏徵爲人鏡，而姦膽形於下，逆耳聞於上。及徵沒，而猶歎過失之不聞。夫以朕之不

敏不明，託於人上，月環其七，而善惡蔑聞。豈諫諍之臣未盡規於不德耶？朕甚懼焉！以爾郾端厚誠明，濟之文學，柔而能立，謙而逾光，命汝弼予，式冀無過於戲！宋景公一諸侯耳，而陳星退之詞；齊威王獨何人哉？能辨日聞之侯。爾其極諫，朕不漏言。可守諫議大夫，餘如故。

これを一讀してみても、全篇は字句の長短に拘わらず散體句式を用いており、文の首尾には於戲、哉、焉、耶などの語氣詞を用いて文意を強調していることに氣づく。これは駢體の修辭表現とかなり違つていて、全體的には古文の文體に近い。

また元稹の『李立則檢校虞部員外郎知鹽鐵東都留後』（『元稹集』卷四十八）を見てみよう。

敕：李立則：國有移用之職曰轉運使，每歲傳置貨賄于京師。其大都要邑之中，則委吏以專留事，漣洛之間，蓋其一也。而柳公綽言爾強白幹舉，吏難其倫，乞以臺省官假借恩榮，俾專劇務，勉服所職，無忘謹廉。可。これは簡潔な短文であり、字句の整然性やリズムの抑揚

に技巧を弄せず、全文は散句を主にして構成されており、駢文の性質は一切見えない。總じて元稹の制誥を總體として眺めると、散體制誥が主流を占めていて、當時の駢體制誥盛行の状況の中で、元稹の散體制誥が革新的な傾向を有していることが分かる。これこそが『舊唐書』などから高い評價を得た一つの理由であろう。ところで唐の制誥全體に對しては、どのような評價がなされているのであろうか。制誥に駢體を用いるのは文學的な理由以外にも、何か他の理由があるのではないか。『新唐書』の編集者宋祁は

文有屬對平仄用事者，供公家一時宣讀施行以快便，然久之不可施于史傳。發修《唐書》未嘗得唐人一詔一令可載于傳者。唯拾對偶之文，近寓古者乃可著于篇。大抵史近古，對偶宜今，以對偶之文入史策，如粉黛飾壯士，笙匏佐鼙鼓，非所施云。《學津討原》第十三集「宋景文筆記」上

と、駢體制誥の朗讀の實用性を取り上げているが、駢體は史傳には合わないとする。前に述べたように『新唐書』は元、白の文章については高い評價を與えず、著者が古文を

白居易の制誥の新體と舊體について(周)

偏愛する痕跡を窺わせるが、後世の文人が唐の制誥に對してどのような評價を與えたかについて、ここにその一端を覗くことができるであろう。さらに「文有屬對平仄用事者，供公家一時宣讀施行以快便」というのは、文章の實用性の點から、制誥には駢體の形式がよく採用されていることを示している。駢體を用いる理由は、制誥を讀む時に韻律を踏み、句の長短も揃っていれば、口からすらすらと出やすいというところにある。それに謝朓の『四六談麈』《學津討原》第二十集）にも、次のように言っている。

四六施于制誥奏文檄，本以便于宣讀，多以四字、六字爲句。宣和間多用全文長句爲對，習尚之久至今未能全變，前輩無此體也。

これから、制誥に駢體を用いれば、獨特のリズムと韻律の美しさを感じられ、讀みやすくなり、確かに實用的であることが明らかである。

四 白居易の中書制誥の文體について

以上、元稹の制誥の文體に關して述べたが、次に彼の復

古論を支持する白居易の制詔はどんなものであるかを見てみよう。

白居易は元和十五年、四十九歳の時に主客郎中知制詔になり、これをきっかけにして、大量の中書制詔を書いた。

『白氏長慶集』では中書制詔は全部で六つの部分に分けている。「一」から「三」までは舊體制詔で、「四」から「六」までは、新體制詔となっている。なお朱金城氏の『白居易集箋校』が制作年を記しているのに従えば、中書制詔が年代の順に排列されてはいないことが明らかなので、中書制詔「一」から「六」までの順にそれぞれ代表的な作品を挙げてみようと思う。まず「一」から「三」までの舊體制詔を一首ずつ挙げて検討してみよう。「中書制詔」一の『章

審規可西川節度副使御史中丞李虞仲、崔戎、姚向、溫會等並西川判官皆賜緋各檢校省官兼御史制』(『白氏長慶集』卷三十一、一五二八)にいう、

敕：西川曰益部，地有險，府有兵，礙戎屏華，號爲難理。故吾命文昌爲帥長，俾鎮撫焉。次命審規爲上介，俾左右焉。又命虞仲、戎、向、會等爲庶寮，俾咨度焉。

進言者，謂文昌賢而審規輩才，以才佐賢，蜀必理矣。輟三署吏，贊丞相府，假憲官職，加臺郎暨一命再命之服以遣之。其於張大光榮，與四方征鎮之賓寮不侔矣。爾等苟佐吾丞相以善政聞，使吾無一方之憂，吾寧久遣汝於諸侯乎？爾其勉之！可依前件。

これは完全な散文體の制詔で、多くの對偶を用いず、平仄にもこだわらない。字句の齊整を求めてもない。また駢文の中にはよくある典故を修辭と比喻の手段とするところもない、敘述式の散文である。今度は『中書制詔二』の『張籍可水部員外郎』(『白氏長慶集』卷三十二、一五五〇)を例に挙げる。

敕：登仕郎，守國子博士張籍：文教興則儒行顯，王澤流則歌詩作。若上以張教流澤爲意，則服儒業詩者宜稍進之。頃籍自校祕文而訓國胄，今又覆名揣稱，以水曹郎處焉。前年已來，凡歷文雅之選三矣，然人皆以爾爲宜。豈非篤于學，敏于行，而貞退之道勝也？與之寵名者，可以獎夫不汲汲于時者。可守尙書水部員外郎，散官、勳、如故。

これも句型が一定せず、四、六の駢儷句を成しておらず、比較的平易な語句を並べている。これも散體の制誥である。次は『中書制誥三』より『元稹除中書舍人翰林學士賜紫金魚袋制』（『白氏長慶集』卷三十三、一五七七）を擧げてみる。

敕：仲尼曰：「志有之，言以足志，文以足言，言之無文，行而不遠。」故吾精求雄文達識之士，掌密命，立內庭。甚難其人，爾中吾選。尙書祠部郎中、知制誥、賜緋魚袋元稹，去年夏拔自祠曹員外，試知制誥而能斐繁詞，鏘弊句，使吾文章言語與三代同風。引之而成綸綍，垂之而爲典訓。凡秉筆者，莫敢與汝爭能。是用命爾爲中書舍人，以司詔令。嘗因暇日，前席與語，語及時政，甚開朕心。是用命爾爲翰林學士，以備訪問。仍以章綬，寵榮其身，一日之中，三加新命。爾宜率素履，思永圖，敬終如初，足以報我。可中書舍人、翰林學士、賜紫金魚袋。

この制誥も散體で、すべて皇帝の元稹に對する賞贊を述べている。「引之而成綸綍，垂之而爲典訓。」という對句がその中にあっても、駢文というわけではない。自然な形

白居易の制誥の新體と舊體について（周）

で使われてくる對句は先秦時代の文章にもすでにあり、また普通の駢體文は大體四字句、六字句を基本的な對偶表現に整えた上、さらに平仄、典故も工夫して、確かに對偶が駢文における無視できない條件ではあるが、對句が入っているからといって、駢體文と速断してはいけない。先に擧げた例から考えてみると、白居易の舊體制誥は大體古文體の形で書かれたものであると思われる。中書制誥「一」から「三」までに收められた作品は、本文で擧げた例以外のものも同じといつてよい。ただ中書制誥一の「孔戣可右散騎常侍制」は駢文であり、恐らく白居易の編集のミスと思われる。もしも「微之所主張，而樂天所從之」という見解に従えば、白居易は確かに元稹の制誥復古の主張に呼應して散體制誥を作ったのである。白居易の舊體制誥が古文體であることがはっきりした上で、白居易の新體制誥が果たして陳寅恪氏のいうように、古文體のものであるかどうかということとをさらに確かめる必要がある。次に新體制誥の検討に移るが、その前に、まず唐における駢體制誥とはどのようなものであったかを見てみよう。唐におけ

る文章の名家の制詰を検討することとして初めに武后朝の鳳閣舍人であった李嶠の『授太子舍人劉如玉等右史制』^⑦『文苑英華』卷三八三を見よう。

鸞臺：朝散大夫行太子舍人劉如玉，朝散大夫檢校麟臺著作佐郎崔融等，並言芳蘭芷，行溫珪璧。或譽美銅樓，或名高石室。記言之重，選眾尤難。宜收博辯之才，俾居良史之任。並可行右史。散官如故。

この中で「言芳蘭芷，行溫珪璧」と「或譽美銅樓，或名高石室」は對句であり、「宜收博辯之才，俾居良史之任」も對になっている。また傍點のように、文句の中の第二字と句末の平仄は大體交互になり、文の最後は六字の對句で結んでいる。「李嶠、蘇味道文擅當時，號蘇李」^⑧『舊唐書』卷九十四という評を得た李嶠のこの制詰は整然たる駢文と見なせるであろう。次に「燕許大手筆」の一人としての蘇頌の『授薛稷諫議大夫制』^⑨『文苑英華』卷三八二を挙げ

門下：中散大夫、行尚書禮部郎中、脩文館直學士、河東縣開國男薛稷，奕代雄詞，身濟其美，光時雅量，士

慕其風。故能懸帳絕倫，昇堂睹奧。掖垣密勿，字列黃纁，仙闥從容，文飛赤管，箴闕之任，惟賢是擇，俾登才子，式寵諫臣。可諫議大夫。餘如故。主者施行。

という。傍點のように平仄が交錯している上に、特に對偶の面に工夫を凝らしている。冒頭から「奕代雄詞」と「光時雅量」とは隔句對である。第二句の「身濟其美」は隔句の「士慕其風」と對應している。次の「懸帳絕倫」と「昇堂睹奧」も對句であり、下の四句は又それぞれ隔句對である。「掖垣密勿」と「仙闥從容」、「字列黃纁」と「文飛赤管」も句を隔てて對になっている。次に「俾登才子，式寵諫臣」も對になっている。このように、唐代の駢體制詰が對句と修辭によく配慮したことが分かるであろう。

また常袞『授崔殷刑部員外郎制』は『文苑英華』卷三九二敕：朝議大夫試太子舍人、兼殿中侍御史崔殷，學義精深，詞華絢麗。臺郎高選，清論洽于朝倫，郡掾左遷，善聲彰於時聽。頃從獎序，未副才名，亟膺新命，俾光舊列。可行尚書刑部員外郎。散官如故。

常袞は天寶年間の狀元であり、制詰で高名を得て、「袞

文章俊拔，當時推重，與楊炎同爲舍人，時稱爲常楊。」
『舊唐書』卷一九」という評があった。先に挙げた李嶠、蘇頌の制詔と同じく、これも駢體文であり、「臺郎高選，清論洽于朝倫，郡掾左遷，善聲彰於時聽。」は四、六字句の隔句對であり、また大體句末に平字と仄字を對置しているように見うけられる。以上挙げた三人の制詔によって、唐代における駢體の公文書の様子がほぼ分かる。駢體制詔は唐に至って成熟期を迎えた。中村裕一氏の『唐代制勅研究』序章には「唐代の王言様式は唐朝の成立と共に確立したのではなく、前代の隋朝や北朝の王言様式を繼承し、若干の改變を加えたものであらうことは容易に推測される」と指摘されている。しかし唐代の制詔の駢體様式は、より遠く南朝の駢體詔書の様式をも繼承した上で、確立されていたものではないかと推測することができる。駢體文を詔書類に用いるのは南朝に始まり、唐朝に盛んになったという結論が得られよう。

さて白居易の新體制詔は「復古改良公式文字」といわれたが、上述したように、「復古」とは散體文を意味してお

白居易の制詔の新體と舊體について（周）

り、白氏の新體制詔は散體文なのか、或いは駢體文なのか、再検討する必要がある。次に「中書制詔」四、新體に收められた「崔群可祕書監分司東都制」『白氏長慶集』卷三十四、一六〇六を例としてあげてみて、この差異を考察してみよう。

天授至寶，爲國重器。始自修己，移于事君。輔弼藩宣，不失其道。及離征鎮，召赴闕庭。方登道途，遂遭疾恙。正在頤養之際，豈任朝調之勞？誠宜許以便安，不可闕其祿食。而移秩外史，分曹東周，加寵優賢，無易于此。且有後命，俟其有瘳。可分祕書監分司東都，散官、勳、賜如故。

これを見れば、この文は四、六字句を用いて、句末では傍點のように平仄を對置し、形式は全體的に整然としている。次に「中書制詔」五、新體の『嚴綬可太子少傅制』『白氏長慶集』卷三十五、一六五八を見てみよう。

敕：東朝保傅，歷代尊崇。漢擇名儒，任先疏廣；晉求耆德，選在山濤。實資六傅之賢，用弘三善之道。檢校司徒、兼太子少保嚴綬：文雅成器，恭謙致用。出領重

鎮、以帥諸侯。入爲具寮、以長卿士。歷踐中外、備管
艱虞。殆三十年、勤亦至矣。況理心以體道、知命而安
時、是謂教誨之人、可領調護之任。由保選傳、爾其敬
之！可太子少傅。

この制誥の第三句からは隔句對であり、「疏廣」、「山濤」
が人名なので、二人に關する典故を用いている。「漢擇名
儒、任先疏廣；晉求耆德、選在山濤。」は隔句對であり、
「出領重鎮、以帥諸侯。入爲具寮、以長卿士。」も隔句對
である。「實資六傳之賢、用弘三善之道。」「文雅成器、
恭謙致用。」「況理心以體道、知命而安時、是謂教誨之人、
可領調護之任。」は前後の句がそれぞれ對になっている。
四字句と六字句を併用し、平仄も整えている。

白居易の中書制誥の中の、あるものとても短く、よく
四字句を用い、駢文の四字句に纏めるといふ形を承襲する
だけで、ほかの修飾は少ない。次に「中書制誥」六の『崔
曄可河南府法曹參軍制』、『白氏長慶集』卷三十六、一七三五
を舉げてみよう。

敕：鄆曹觀察判官、監察御史裏行崔曄：文行節躬、公

清奉職。士林推美、藩府薦能。軍旅之間、久資其用；
忠勤之後、不殞其名。宜拔才于功臣、俾試吏于府掾。
可依前件。

このように句末で平仄を入れ換え、四、六字句を用い
はするが、飾りが少ない。文の冒頭から「文行節躬、公清奉
職。士林推美、藩府薦能」の前後の句二つずつが對になっ
ており、最後のところも「宜拔才于功臣、俾試吏于府掾」
の對句で全文を結ぶ。白居易の中書制誥「五」、「六」をひ
もといてみれば、このような短く、簡潔なものを多く見か
ける。これも彼の舊體制誥と異なる點の一つである。次に
「中書制誥」六の『神策軍推官田疇加官制』、『白氏長慶集』
卷三十六、一七四〇を舉げてみよう。

敕：田疇：官列環衛、職參禁軍。慎檢有聞、恭勤無怠。
顧是勞效、例當轉遷。郡佐官寮、以示兼寵。

上の通り、この制誥も句末で平仄を入れ換え、句も整然
として、すべて四字句を用いており、飾りがなく、簡潔な
駢體制誥である。

上述したように、白居易の新體制誥は裝飾が少ないが、

駢文としての味わいを保っている平易な文體であり、李嶠、蘇頌などの制誥に比べてみると、文辭の修飾よりも、平仄と字句の調整を重んじて、對偶や修辭などの面で簡易化している。更に六字句を省略して全篇を四字句で統一している場合もあり、短い作品にそうしたものが多い。舊體制誥に比べて新體制誥の構造はさらに纏まっており、語句も十分に練れている上に、平仄と四、六字句を多用しはするが、明瞭簡潔で、典故を頻用したり、駢體式の對偶句法を用いる事は少ない。このような簡潔な駢體制誥は白居易が獨創したものであろうか。先人の影響を受けてはいないか、少しさかのぼって見てみよう。

前述したように中唐に至ると政治的、軍事的活動が活発となると共に、大量の制誥が製作され、一つの文學様式として獨自の發展を遂げることとなる。その中で代表的なものは陸贄の制誥である。『新唐書 陸贄傳』(『新唐書』卷一五七)には次のように述べている。

從狩奉天，機務填總，遠近調發，奏請報下，書詔日數百，贄初若不經思，逮成，皆罔盡事情，衍繹孰復，人

白居易の制誥の新體と舊體について(周)

人可曉。

ここに見るように陸贄の制誥が作られた背景には、政治、軍事活動との密接な關連があり、内容面でも、主に國家に關する政治、軍事の問題を反映する。これは白居易の中書制誥(新體)と少し異なるところであるが、文體については、二人の制誥とも修辭と典故を偏重せず、平易な駢文であるという共通の接點で繋がっていると考えられる。

唐の安史の亂以後、軍閥が依然として割據し、皇帝の權力が弱まり、内戰が頻りに起こり、唐の德宗の時、もっとも唐王朝の政權に脅威を構えたのは朱泚、李希烈の反亂であつた。その故に、制誥は一時期には官吏任免の公文書ではなく、中央が地方軍閥を討伐する檄文になってしまったこともある。陸贄の制誥の中には、このようなものが少なくないのである。そしてある場合には制誥が臣下に皇帝の命令を伝えるのみでなく、國民に向かって中央政府の政策を頒布する公文書の一つになった。例えば陸贄の『優卹畿內百姓併除十縣令詔』、『重優復興元府及洋鳳等州百姓詔』^④などである。陸贄の制誥は白居易以前の時期の作としては

素朴簡易の制誥として注目される。唐德宗の建中四年に翰林學士となつて以來、彼の制誥は他の人の數多くの作品と違い、殆ど文辭の修飾や典故を用いない駢文である。陸贄は唐における駢體制誥改革の先驅者といえる。まず陸贄の『重原有淮西將士詔』（『唐陸宣公翰苑集』制誥卷三、下同）を見てみよう。

乃者希烈亂常，阻兵竊號，污脅士眾，殘虐烝黎。朕志在好生，誠深罪己，爲人受恥，不忍加兵，唯茲一軍，代著忠節，果殲元惡，不替舊勳。詢於衆情，就拜戎帥，人亦勞止，期於小康，旋乖恤下之方，重致喪身之禍。由朕薄德，俾人不寧，撫臨萬邦，且愧且悼。猶賴將校士旅，秉其誠心，邦人不驚，軍部無撓，以茲節效，良有可嘉，所宜慰安，俾洽寬澤，應將士吏人承前所有諸過犯，罪無輕重，一切釋放，曠然昭洗，咸與惟新，其有先請受莊宅財物者，各以見管爲主，將士依賜節料並家口糧賜等，一切並準舊例，以時給付，不得停減。先令優與賞設，亦準元敕處分，務令豐厚，以稱朕懷。仍加曉諭，各委知悉。

これは典故を用いず、難句もない。比較的容易な文語で書いたものである。この中には「應將士吏人承前所有諸過犯……」「其有先請受莊宅財物者」などのような散句が入っているが、總體から見ると、大抵四字句、六字句に絞られている。

陸贄の制誥は全體から見て、大抵具體的事實に就いて論じるもので、典故や對偶麗句などの文辭の技巧に留意するよりも、平俗で、簡潔な文辭を多用している。そして中唐においては藩鎮の内亂がよく起こったので、戦亂に直面する陸贄は君主を輔弼し、反亂を定めて、戦争の局面を終結させようということに重要な役割を果たした。これに關して陸贄が作った制誥は、かなり嚴肅な調子が見られ、李嶠、蘇頌の制誥のような文辭の裝飾が一扫されて、「李希烈蔑義背恩，窮姦極暴。謂神器可以力取，謂生靈可以詐欺。志在兇殘，躬行僭竊，罪無與比，法實難容」（『誅李希烈後原淮西將士并授陳仙奇節度詔』制誥卷三）のような直言激語をしばしば用いる。それに制誥を受ける相手によって、用いる文句も違うが、それは兵士や庶民の中には、無學なものがほ

とんだので、できる限り難しい文語を避けているのである。このような語句の浅近な制詔は『陸宣公制詔』の中によく目に付き、例えば『賜京畿及同華等州百姓種子賑給貧人詔』、『賜將士名奉天定難功臣詔』（制詔卷四）など、皆平易なものである。また『盧翰太子賓客制』（制詔卷七）を見てみよう。

求賢審官，以康庶績，就閑優秩，以處舊臣。蓋欲敦終始之恩，全進退之禮。金紫光祿大夫行門下平章事范陽郡公盧翰，頃因多難，從我於征，以其年及老成，任推先進，方將求舊，擢處臺衡，在再迄今，亟淹星歲，勤勞既久，衰疾有加，宜徙職於春闈，用優賢於暮齒。可太子賓客，勳賜如故。

このような文人官僚に對する官職の授與の制詔は、わざと平俗な文辭を用いず、典雅な文辭を用いている。前に舉げた制詔に比べれば、語句と作風が多少違う。陸贄の制詔は受ける人の身分によって異なる文辭を用い、用語面においてより一層の實用性を重んじていることが見逃せない。

陸贄の數ある制詔の特徴と云えば、平易な語彙を用い、

白居易の制詔の新體と舊體について（周）

構文においては、一應駢體の形に従うものの、それに束縛されず典故と修辭の技巧を弄ばずに、雅語の表現が多かったことなどである。陸贄の制詔のもう一つの特徴として長編の多さがある。これはその時期の國家の重大な政治、軍事活動によるところが大きからう。例えば『平朱泚後車駕還京大赦制』（制詔卷二）は二千百八十字の長文である。しかし授官の制詔には冗語の目につくものもある。例えば『張延賞中書侍郎平章事制』（制詔卷七）の冒頭を舉げてみる。

上柱國魏國公張延賞，崇飭文行，勵精理道；踐歷中外，所至有聲；慮必周密，心無屈撓；簡廉以肅吏，慈惠以愛人；明以照姦，和以定眾；去若始至，久而見思，秉志不渝，課績常最。……

このように、長い文句を費して、張延賞を稱賛するが、どうも冗語が多く、冗長さを免れない感じがする。これに對して、白居易の新體制詔はもっと簡明で、冒頭の贊辭をしばしば省略しており、陸贄の制詔との違いが明らかである。白居易の數ある官吏の任命の制詔の形は陸贄とは異なる。

る作風のものである。白居易が陸贄の後に續こうとした理由は、元稹の制誥の改革に呼應し、六朝系統のような駢體の文句の典故、修辭過剩の宿弊を打破しつつ、王命を流暢に宣讀するため、駢體の形式を保たなければならなかった。その爲駢體の形式を改良する以外に方法が見当たらず、その一番簡単な手段として、舊駢體の法式を簡約化することにしたといえよう。陸贄はこの制誥文體改革の先導役を果たし、必然的に白居易がその後についていったのではないかと考えられる。白居易の新體制誥は、文辭の簡易と典故を偏重しないことにおいて陸贄の制誥の性格と近似している。また二人とも平仄と文辭を整えながら、修辭は行き過ぎることがない。駢體制誥の形式を簡約化する點において、白居易と陸贄の行きかたは一致していると見られる。

陸贄の制誥は駢體の形を取ってはいいるが、駢體の規則を教條化せず、構文上に融通性があり、平易な文辭表現を用い、以後の文章に對して、大きな影響を与えたと思われる。例えば宋祁と司馬光は陸贄の文を次のように史書に收めさせている。

宋祁作贄傳贊，稱其論諫數十百篇。譏陳時病，皆本仁義，炳炳如丹青，而惜德宗之不能用。故新唐書例不錄排偶之作，獨取贄文十餘篇以爲後世法。司馬光作資治通鑑，尤重贄義論。採奏疏三十九篇……。（欽定四庫全書總目提要）卷一百五十、別集三

勿論彼らが陸贄に傾倒するのは、文學者としてよりも政治家としての事績を頌するからであって、彼の儒家的な經世報國の理想も宋代の文人に共鳴を呼び起こしたであろう。「蘇子瞻少而能文，以賈誼、陸贄自命」^④（焦竑「刻蘇長公集序」『蘇軾文集』附錄）というように陸贄は賈誼に匹敵する人物であるとの見方もある。宋代の文人が見た陸贄は文學者としてよりも、寧ろ政治家としてであった。それが陸贄の思想を反映する彼の奏議、制誥が宋の古文派に尊ばれた一つの原因であろう。もう一つの理由は次のようなもので、「陸宣公文字不用事，而句語鏗鏘，法度嚴整，議論切當，事情明白，得君臣告戒之體。」^⑤（李塗『文章精義』）と指摘されたように、陸贄の文は議論が優れて駢體の枠を墨守せず、實用主義的な駢文を創作した。だから宋代の古文派の贊同

を得られたのである。瞿兌之『中國駢文概論』に「宋朝一班講古文の人、遇著作制誥箋表、不能不用駢體的時候、便又開辟一種新的文體來。這種新文體是不用典的駢文、是以古文作法來作的駢文、也可以說是白描的駢文、仿佛畫家從金碧山水解放到水墨山水一樣。」と述べているが、實際その「新的文體」は宋代の文人が作りはじめたものではなく、陸贄の奏議、制誥が宋の古文派に大きな啓發を與えたことは間違いない。『宋史』卷三一九「歐陽修傳」に「蘇軾敘其文曰：『論大道似韓愈，論事似陸贄，記事似司馬遷，詩賦似李白』。識者以爲知言」^④というように、陸贄の文體は歐陽修にもながれこんでいる。

五 結 び

以上の通り、白居易の新體制誥は駢體文であることが明らかに became。そして白居易の舊體と新體は異なる時期に書いたものではなく、同時期のうちに新體と舊體をそれぞれ作り、舊體は八十五首、新體は百四十八首あり、新體は舊體の殆ど倍である。どんな場合に舊體（古文體）を用い、

白居易の制誥の新體と舊體について（周）

どんな場合に新體（駢體）を用いるのかということは興味深い問題である。吳納の『文章辨體序説・制、誥』に「宋承唐制，其曰『制』者，以拜三公三省等職。辭必四六，以便宣讀于庭。『誥』則或用散文，以其直告某官也」^④といい、制誥を宣讀する必要があるときには、駢體の形式が用いられ、本人に直接傳える場合には、散文の形式が用いられることが明らかである。ならば白居易は制誥が宣讀されるか否かによって、どちらの文體にするのかを判斷したのではないかと推測してもよからう。鈴木虎雄氏が「詔勅といふものは朝廷に於て之を宣讀するものである。宣讀するためには句調のわるいものよりはよいものがよいに相違ないものである。そこで愈詔勅には四六文が採用せられて已まぬことになったのである。散文が盛となった唐の中葉以後、及び宋になつても已まぬといふのは必要が有つたからである。」（「支那の詔勅文と其の起草者」と指摘されたように、宣讀するかしないかによって文體を決めたのである。

白居易の中書制誥全體を眺めると、彼は元稹の復古論に賛成したが、古文體にこだわらずに、古い駢體の形式を改

革し、平明な新體制詠を作った。元、白の散體制詠は當時の文壇に獨特の風格を備える公文書として出現し、確實に人の目を引いたわけである。それに白居易の新體制詠は數量の上で舊體より多いだけではなく、文辭精練の面でも舊體に引けを取らない。元、白の制詠文體改革は、彼等の詩歌と同じく中唐文學の中で、あるべき位置を付與される必要がある。元稹は『酬樂天餘思不盡加爲六韻之作』に「律呂同聲我爾身，文章君是一伶倫。眾推賈誼爲才子，帝喜相如作侍臣。次韻千言曾報答，直詞三道共經綸。元詩駁雜眞難辨，白樸流傳用轉新……^④」といい、また「白樸」の句については「樂天于翰林中書，取書詔批答詞等，撰爲程式，禁中號爲白樸。每有新入學士求訪，寶重過于六典也。^⑤」という注を付け加えている。白居易の制詠は以後の制詠に影響を与えたことを見過ごしてはならないのであるが、これについての考察は稿を改めねばならない。

注釈

- ① 『元白詩箋證稿』（上海古典文學出版社、一九五八年、下同）

- ② 『元稹集』第四十卷（中華書局、一九八二年、下同）
 ③ 『白居易研究』花房英樹（世界思想社、一九七一年）
 ④ 『白氏文集』六 岡村繁「新釋漢文大系白氏文集」（明治書院、平成五年）
 ⑤ 『白居易集箋校』卷四十八（上海古籍出版社、下同）
 ⑥ 『白居易集箋校』卷五十一。
 ⑦ 『白氏文集』（京都大學人文科學研究所、昭和四十八年）
 ⑧ 鈴木虎雄氏「支那の詔敕文と其の起草者」（『東方學報』第九冊、昭和十三年）
 ⑨ 『唐代古文運動通論』第七章参照。（百花文藝出版社、一九八四年）
 ⑩ 『元白詩箋證稿』第四章「豔詩及悼亡詩」参照。
 ⑪ 蔡邕『獨斷』、『影印咸淳本左氏百川學海』甲集三參照。
 ⑫ 『文心雕龍』卷四（范文瀾、開明書店、一九三六年）參照。
 ⑬ 『空海全集』第五卷「文鏡秘府論・西」（筑摩書房、昭和六十一年、下同）
 ⑭ 『空海全集』第五卷「文鏡秘府論・西」
 ⑮ 『文選・總說』（角川書店、一九八八年）
 ⑯ 『全上古三代秦漢三國六朝文』「全漢文卷二」（中華書局一九五八年、下同）
 ⑰ 『全上古三代秦漢三國六朝文』「全後漢文卷一」
 ⑱ 『文選』卷三十五（中華書局、一九七七年、下同）
 ⑲ 『隋唐五代文學思想史』羅宗強（上海古籍出版社、一九八

六年)

- ⑲ 『文選』卷三十五。
⑳ 『文選・總說』(角川書店、一九八八年) 参照。
㉑ 『全上古三代秦漢三國六朝文』「全齊文卷五」
⑳ 『全上古三代秦漢三國六朝文』「全梁文卷二十六」
㉒ 同右。
㉓ 『全上古三代秦漢三國六朝文』「全梁文卷二十七」
㉔ 『文心雕龍・詔策篇』
㉕ 『玉海』卷二〇二(江蘇古籍出版社) 参照。
㉖ 『白氏長慶集』卷五十三、四部叢刊本(下同)
㉗ 『白氏長慶集』卷三十三。
㉘ 『漢書』卷六、「武帝紀」(中華書局、一九六二年)
㉙ 『元稹集』第四十卷。
㉚ 『白居易集箋校』卷六十五「策林四」、これは朱金城氏の『白居易年譜簡編』附録三によれば、元和元年に作られたもので、彼の『與元九書』より、十年早いことが分かる。白居易の早期の文學批評といえる作品である。
㉛ 『吉川幸次郎全集』卷七「北周の大詔について」参照(筑摩書房、昭和四十三年五月發行)
㉜ この出典は曹丕の『典論・論文』に「如祭之初征、登樓、槐賦、征思、幹之玄猿、漏卮、圓扇、橘賦、雖張、蔡不過也、然於他文未能稱是。」である。
㉝ 『唐宋白孔六帖』卷第三十八「十三制詔」
白居易の制詔の新體と舊體について(周)

③⑤ 『文華辨體序說・文體明變序說』(人民文學出版社、一九六二年) 参照。

③⑦ 『文苑英華』卷三百八十三(臺灣華文書局) 参照。

③⑧ 『登科記考』卷九(中華書局、一九八四年) 参照。

③⑨ 中村裕一氏『唐代制勅研究』「序章」第二節(汲古書院、一九九一年) 参照。

④① 『唐陸宣公翰苑集』、「制詔」卷四。

④② 『蘇軾文集』第六冊(中華書局、一九八六年) 参照。

④③ 『文則・文章精義』(人民文學出版社、一九六二年)

④④ 『宋史』卷三一九(中華書局、一九七七年)。

④⑤ 『文章辨體序說・文體明辨序說』(人民文學出版社、一九六二年) 参照。

④⑥ 『元稹集』卷第二十二。

④⑦ 『野客叢書』(中華書局、一九八七、卷三十)に「(白朴)檢『唐・藝文志』及『崇文總目』無聞。每訪此書不獲、適有以一編求售、號曰『制僕』、開帙覽之、即微之所謂白樸者是也。爲卷上中下三。上卷文武階勳等、中卷制頭、制肩、制腹、制腰、制尾。下卷將相刺史節度之類。此蓋樂天取當時制文編類、以規後學者。」と述べている。

附記 本論校正中に下定雅弘氏の「白居易の中書制詔——その舊體と新體の分類について——」(『帝塚山學院大學研究論集』第二十八集、一九九三年十二月)が刊行され、同じ問題

中國文學報 第四十八冊

を取り上げておられることを知った。中間の手續きは異なるものの、ほぼ同じ結論を提出されている。氏の論を支持する意味もこめて、このまま刊することにさせていただく。

一九九四年三月二十日